

主 題：弟子と出会われた最高の師**聖書箇所：ヨハネの福音書 1章43-51節**

きょうは「弟子と出会われた最高の師」について、1章の最後の部分43-51節を中心に考えてみたいと思います。ぜひそれぞれみことばによく耳を傾けてみてください。

ヨハネ1：43-51

「:43 その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた。そして、ピリポを見つけて「わたしに従って来なさい」と言われた。:44 ピリポは、ベツサイダの人で、アンデレやペテロと同じ町の出身であった。:45 彼はナタナエルを見つけて言った。「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」:46 ナタナエルは彼に言った。「ナザレから何の良いものが出るだろう。」ピリポは言った。「来て、そして、見なさい。」:47 イエスはナタナエルが自分のほうに来るのを見て、彼について言われた。「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りがない。」:48 ナタナエルはイエスに言った。「どうして私をご存じなのですか。」イエスは言われた。「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです。」:49 ナタナエルは答えた。「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」:50 イエスは答えて言われた。「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったので、あなたは信じるのですか。あなたは、それよりもさらに大きなことを見ることになります。」:51 そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。」

●ポリュカルポス

遡ること紀元69年、ポリュカルポスという名の信仰者がいました。若い頃から十二使徒のひとり、ヨハネのもとで学んでいた彼は、あらゆる面においてキリストの福音に根ざしたすばらしい歩みを行っていた人物でした。恵みによって与えられた救いを彼はいつも感謝して、イエス様を愛する弟子のひとりとして、周りの人にも熱心にみことばを宣べ伝えていたのです。しかし昔も今も変わりません。忠実に歩もうとするクリスチャンには、どんな時もそれを妨げようとする戦いや迫害があります。ポリュカルポスも例外ではありませんでした。ある日のことです。ローマの役人たちが自分を捕らえるという計画をしていることが、友人づてに彼の耳に届きます。彼の友人たちは恐れ戸惑い、今すぐに逃げるようにと促しました。しかしポリュカルポス本人はいつまでも逃げようとしません。むしろ慌てている彼らのことをなだめて、主に祈りをささげるのです。そしてそのあと、彼のもとには実際に武装したローマの兵士たちがやって来ました。でもここで彼がとっていた行動は驚くべきものでした。彼は自分を捕まえにやって来た兵士たちをみずから家に招いて、そして食事をふるまったのです。そして彼らにこうお願いしました。「1時間、私に静かに祈る時間をください。」ポリュカルポスは、たとえ目の前に自分のいのちを脅かす存在がいたとしても心の平安を失うことはありませんでした。祈りを終えた後、彼は捕らえられて当時のローマ地方総督であったスタティウス・クワドラスのもとへと連れて行かれます。そして、その場でキリストに対する信仰を捨てるようにと求められるのです。間違いなくこの場面においてこの総督の命というものに聞き従わなかったとすれば、それはそのまま死を意味しました。しかしそんな状況の中で彼は大胆にこう口にしていたのです。「私は86年間キリストに仕えてきましたが、彼は決して私に対して悪いことをしませんでした。どうして、私を救ってくださった私の主を冒瀆することができましようか。…それゆえ、あなたの愛する御子、永遠なるイエスキリストによって、私は全てにおいてあなたを賛美し、誉めたたえ、あがめます。御子と聖霊と共に、栄光が今も、またこの先も

あなたにありますように。アーメン。」と。こうしてポリュカルポスは燃えさかるその火の中で主を賛美しながら殉教していきました。イエス様を愛した弟子として、彼は最後まで自分に与えられた信仰のレースを忠実に走り切ったのです。

覚えていますか？先週私たちは、イエス様の弟子として、クリスチャンとして歩いていくというのがどういうことなのを、ヨハネのことばから一緒に学びました。イエス様の弟子として歩いていくことは、師であるイエス様と同じ道を歩いていく、ということでした。一時的に、自分の都合の良い時だけ、自分の都合の良い基準でもって従っていこうとするではありません。たとえあらゆるものを失うことになったとしても、十字架で自分をささげてくださったその主の犠牲を覚えて、自分も喜んですべてをささげてついて行こうとするわけです。イエス様もこんなことばを残しておられました。ルカ 9：23-25 「:23 …「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。:24 自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。:25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の得がありません。」かつての弟子たちはまさにこのことばのとおり生きていました。ポリュカルポスにしても、先週私たちが見たアンデレであったりペテロであったり、またヨハネにしても、イエス様と出会ってイエス様を手にした者たちは、それ以外のものを喜んで手放し最後まで歩もうとしていました。もちろんもう私たちもよく知っているとおりに、彼らも完璧ではありませんでした。ペテロの姿もアンデレの姿もヨハネの姿もこれから福音書を通して見ていきますが、彼らもいろんな失敗をしました。いろんな罪を犯しました。イエス様を悲しませることも多々ありました。それでも、最高の師と出会った彼らは、その師とともに歩むことのできる喜びのゆえに、犠牲を伴い苦しみがあつたとしても主とともに歩むことに希望を見出し、最後まで忠実に歩いてきたのです。彼らは自分が従うその最高の師の姿、イエス様の姿をいつも覚えていました。

きょう私たちがこれから一緒に見ていきたいことは、そのように彼らがすべてをささげていた最高の師イエス・キリストがどんなお方なのかということです。これから特に43-51節を見ていきますが、最高の師であるイエス・キリストに関して、ここに私たちは三つの事実を見て取ることができます。そして皆さん、私たちも今イエス・キリストを信じているのであれば、イエス・キリストに従っているのであれば、この主に従っています。この主と同じ道を歩んでいます。だからこそ、どんなお方に自分が今信頼できるのか、どんなお方に自分は従っていくことができるのか、そのことをぜひ改めて考えてみてください。そして、どんなすばらしいお方について行けるのかということの喜びに満ちあふれてきょう帰ってくださることを、心から祈っています。

○最高の師であるイエス・キリスト：三つの事実

1. 探し出してくださるお方 43-46節

では早速、最高の師であるイエス・キリストに関する事実の一つ目は、この方は「探し出してくださるお方」だということです。最高の師は弟子を見つけて、そしてご自分のもとへと呼んでくださるお方でした。みことばを見てください。43-44節は、まずこんなふう記されています。「:43 その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた。そして、ピリポを見つけて「わたしに従って来なさい」と言われた。:44 ピリポは、ベツサイダの人で、アンデレやペテロと同じ町の出身であった。」たぶん読んで気づいたと思います。この箇所も冒頭、またまた「その翌日」ということばで始まっていました。これまでの流れを覚えています？これまでも私たちは「その翌日」「その翌日」「その翌日」と連日の出来事を見てきました。一番初めを思い出してみると、1：19-28節で私たちは、バプテスマのヨハネが、ユダヤ人宗教家たちが遣わした調査隊の尋問を受けている場面を見ました。それが一日目に起きた出来事だったので。そして次の29節は「その翌日」ということばで始まっていきますが、29-34節では、自分のほうにやって来られるイエス様の姿を見てヨハネが、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と宣べて

いました。それが二日目の出来事だったのです。そして先週、私たちは35-42節を見ました。35節も「その翌日」ということばで始まっていました。ヨハネの二人の弟子やペテロがイエス様に出会った場面がこの35-42節に書かれていたのです。それが三日目の出来事でした。そしてその流れを受けて、この43節から四日目の出来事が記されていました。今43-44節を読みましたが、まず四日目に起こっていたことは、ガリラヤに行こうとされたイエス様が、ピリポを見つけられました。注意してほしいのは、逆じゃありません。ピリポが何とかしてイエス様を探し当てたわけではありません。イエス様がピリポを見つけ出して、ご自分に「従って来なさい。」と、招いておられたのです。

▶「ピリポ」

ちょっと立ち止まって考えてみてください。「ピリポ」という人物が登場しましたが、ピリポとはどんな人物だったのでしょうか。残念ながら私たちには多くのことは分かっていません。少なくとも言えるのは、彼はアンデレヤやペテロと同じ「ベツサイダ」と呼ばれる町の出身でした。この「ベツサイダ」という名前には、もともと「漁師の家」という意味が含まれています。だからこそ、聖書学者の中では、ピリポはアンデレヤやペテロと親しい関係にあっただけではなくて、一緒に漁師の仕事をしていたのではないかと考えられてもいます。いずれにしろ、ピリポは人々の間で注目を集めていたようなスターでもなければ、特別な仕事をしていた者でもなく、おそらく彼は周りの者と同じような職に就いていた、ごく普通の人物でした。

また、このピリポに関してもう少し言うなら、ピリポはいろんなことで疑問を覚えたり、混乱を覚えたり、イエス様のことを誤解してしまうような人物でもありました。後に十二弟子のひとりとして歩むことにもなるこのピリポですけれども、その姿が福音書を通してこんなふう描かれているのです。ヨハネ6：5-7「:5 イエスは目を上げて、大ぜいの人の群れがご自分のほうに来るのを見て、ピリポに言われた。「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか。」:6 もっとも、イエスは、ピリポをためしてこう言われたのであった。イエスは、ご自分では、しようとしていることを知っておられたからである。:7 ピリポはイエスに答えた。「めいめいが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」と。ちょっとこの姿を頭に入れた上で、今度はヨハネ14：7-9を見るとこんなふう書いています。「:7 あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずです。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。」:8 ピリポはイエスに言った。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。」ピリポは、すべての問題を容易に解決することのできる主とともに歩んでいました。ピリポはこの方の圧倒的な力を何度も何度も目の当たりにしていました。でも自分の頭では到底理解できないような問題が降りかかってきたときに、その問題に心が振り回され支配されてしまうような弱さも持っていたのです。3年の間、最も身近でイエス様のことばを何度も何度も聞き続けてきました。それでもその意図を理解するには遅く、頑さや鈍さも持っていた人物でした。さまざまな過ちを犯し、失敗をし、イエス様を悲しませることもありました。

それでね、皆さん、ここで凄いのは、初めにピリポを弟子として選ぶ時、イエス様はこのようなピリポの姿をご存じなかったのでしょうか？彼の弱さや彼の愚かさには全く気づかずに、後々それらが見えてきたときに、うわっ、やってしまった…やっぱりほかの人を弟子にしていればよかった…と、後悔を覚えておられたのでしょうか？どう思います？そうではありませんでした。神様であるイエス様は、当然最初からすべてのことをご存じでした。ピリポがどれだけのミスをするのかも、どれだけ罪を犯すのかも、どれだけご自身に逆らうのかも、そういったこともすべてご存じでした。でもそれでいてなお、主ご自身がピリポを見出しておられたのです。凄いと思いませんか？この先、失意や悲しみを味わって、十字架にかかるその前にはご自分を置いて逃げていくようなことになることさえご存じでありながら、

イエス様はピリポを探し出し、「わたしに従って来なさい。」とご自分のもとへと招かれていたのです。弟子がまず愛したのではありませんでした。最高の師がまず弟子を愛し、そしてみずから進んでその手を差し伸べておられたのです。

そして皆さん、これは私たちも同じでした。ほかのだれでもありません。神様が、イエス様が私たちのことも見つけてくださいました。私たちが自分自身の罪過と罪との中に死に、神様に逆らい、さまよい続けていたそんな時、私たちがまず主が探し出してくださったのです。ある人は言うかもしれません。自分が救われた時を振り返って、「私はイエス様を見つけました。」「私は悔い改めてイエス様を信じました。」「私はイエス様を自分の救い主として、自分の主人として受け入れました。」と。もちろんこうして主の前に悔い改めるということも、主を信じるということも、私たちひとりひとりに与えられている大切な責任の一つです。でも同時に、そういった悔い改めも、信仰もすべて神様からのギフトにしか過ぎませんでした。神様からの賜物にしか過ぎませんでした。エペソ2：8にこんなふうに書いています。私たちがよく知っている箇所の一つでしょう。「：8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」私たちが自身から出たものは一つとしてありませんでした。私たちが、自分の罪深さや救い主の必要性というものに最初に気づいたのではありません。神様の恵みが私たちのうちに働いてそれらに気づかせてくださいました。私たちが自身をまずどうにかしてイエス様を求めたのではありません。イエス様が私たちに先に手を伸ばし、弟子として自分に従ってくるようにと、そうして優しく呼んでくださるのです。この世にいられた目的を、イエス様ご自身も繰り返し聖書の中で宣べておられました。例えばマルコ2：17「…「**医者**を必要とするのは**丈夫な者**ではなく、**病人**です。わたしは**正しい人**を招くためではなく、**罪人**を招くために来たのです。」」と書いています。またルカ19：10でもこう言われていました。「**人の子は、失われた人**を捜して救うために来たのです。」これが、人の子であるイエス・キリストの成されるすばらしい働きでした。イエス様は私たちのうちにある弱さや愚かさ気づいていなかったのではありません。皆さん、イエス様は私たちが救われたあとも、さまざまな過ちや失敗や罪を犯すということを知らなかったのでもありません。私たちのうちにある汚さや罪深さを見て見ぬふりをされたのでもありません。そうではなく、イエス様はすべてを最初からご存じでした。しかしそれでいてなお、敵として頑なに逆らって罪人としてさまよい続けていたそんな私たちを探し出し、ご自分のもとへと招き入れようとしてくださったのです。私たちがまず選んだのではありません。この方が私たちに救い出すためにご自分のいのちを喜んでささげてくださったのです。そしてその尊い犠牲のゆえに、私たちはこの方に対する信仰のゆえに、恵みのゆえに、本来あるべき方のもとに戻ることが許されたのです。Iペテロ2：22-25にこのように書かれていました。「：22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。：23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。：24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。：25 あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」感謝なことだと思いませんか？救いに関して自分の手柄や功績として誇ることができるものは、文字通り何もありませんでした。私たちは、ただ大きな愛によって探し出してくださったその主のゆえに救いへと導かれたのです、そうだとすれば、私たちにできることは、この方を心から賛美しながら喜んで弟子として従っていくことです。

そして皆さん、もしこの方の弟子として従ってついて行こうとするのであれば、私たちは一つのことを喜びの表れとしてなしていくことができます。何かと言えば、みことばが教えてくれていました。1：45-46でイエス様に出会ったあとのピリポの様子が見て取れます。ピリポはどんな行動をとっていたのか、こう書かれていました。「：45 彼はナタナエルを見つけて言った。「**私たちは、モーセが律法の**

中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」:46 ナタナエルは彼に言った。「ナザレから何の良いものが出るだろう。」ピリポは言った。「来て、そして、見なさい。」」ピリポは何をしていました？ピリポがなしていたことは、自分が知ったそのイエス様のことを、友に宣べ伝えていたのです。出会ったばかりの彼が、すべてのことをわかっていたわけではありません。でも、イエス様が旧約聖書を通して約束され続けてきたその救世主であるということに気づいた彼は、それで十分でした。その感動を自分のうちで留めておくことができなかつたのです。覚えています？先週見たアンデレも同じでした。アンデレもイエス様に会ったあと、彼は自分の兄弟ペテロに「イエス様に会ったんだ！」と伝えていました。イエス様に会った弟子たちはみな同じようにして、熱意にあふれて偉大な主のすばらしさを、自分が知っているそのすばらしさを素直に伝えようとするわけです。ピリポは自分の確信を、自分の喜び自分の感謝を、ナタナエルに伝えました。

▶「ナタナエル」

ちなみにこの「ナタナエル」という人物に関しては、実を言うと多くの議論がなされています。というのも、このナタナエルと言う名前は、ほかの福音書の中では1回も出てきません。だからこそある人たちは、この人物が十二弟子のひとりだった「バルトロマイ」ではないか、と考えています。その理由は、福音書の中で十二弟子の紹介をされるとき、例えばマタイ3章や10章に出てきますが、その時にピリポとこのバルトロマイがいつも一緒に触れられているのです。そしてそれだけではなくて、この「バルトロマイ」という名前が、ヘブル語では「トロマイの息子」とも訳すことができました。だからこそ「ナタナエル」はこのバルトロマイに与えられた名前だったのではないかとわかれていたりもします。「トロマイの息子・ナタナエル」と。いろんな議論がなされています。そして詳しい事はよくわかりません。ただ私たちにとって十分わかることは、このナタナエルも旧約聖書に精通していた人物だったということ、そして彼の出身がナザレの町からほんの十数キロ離れたカナの町だったということです。

ナタナエルは旧約聖書をよくわかっていました。ナタナエルはナザレという町から16キロぐらい離れたカナの町の出身でした。ちょっと皆さん、ナタナエルの立場に立って考えてみてください。先も言いましたが、ナタナエルは旧約をよくわかっていたからこそ、その旧約を通して預言され続けてきた救世主の凄さや力強さをよくわかっていたのです。ほかのユダヤ人たちと一緒に、同じようにその現れを今か今かと待っていました。旧約聖書を読んでその救世主の凄さというものを考えていれば、そのようにして現れる方は、凄い所から、凄いかたちで現れるのではないかと、その誕生を思い浮かべていたかもしれません。それが、突然友がやって来て「きょう私は約束の救世主に会ったんだ！そしてその方がナザレの生まれなんだ！」と言え、ナタナエルはどう思ったでしょう？ナタナエルは「??」となるわけです。ナザレという町は、別に特別な場所ではありませんでした。有名な町でもありません。むしろナザレという町は田舎にある、取るに足らない一つの小さな町だったのです。だれもそんな所から約束の救世主が出てくるなどと考えもしませんでした。だからナタナエルは信じられませんでした。偉大なメシヤがそんな場所から現れることなどありえませんでした。と。王となられるようなお方が栄えている大都市から生まれるならまだしも、何でそんな小さな町から現れるのか、と。だから彼はいろんな疑問を抱きました。そしてその心の思いを正直に口にしました。46節で言っていましたね。「ナザレから何の良いものが出るだろう。」と。

注目してほしいのは、その問いに対してピリポが何と答えたか、です。ピリポはこう答えました。「来て、そして、見なさい。」ピリポはここで、ささいな反論をしようともしていませんでした。旧約聖書をよく知っていたわけなので、旧約聖書から自分自身の考えや正しさを主張することもできました。でもそれもしてませんでした。ただ彼はイエス様をそのまま紹介したのです。私は何も言いません。自分で来て、イエス様がだれなのかをその目で見てください。自分で来て、イエス様のことばをその耳で聞

いてください。巧みな説明や巧みな議論によって納得させようとするのではなく、ただ私を招いてくださったそのイエス様のもとへ確かめに行ってくださいと。そのようにして促したのです。ナタナエルはそのことばを聞きました。ピリポはイエス様に直接会いさえすれば、すべての疑問は解決される、その疑念は晴れることになると確信していたのです。

そして、これは今の私たちも同じです。私たちもいろんなかたちで伝道することができます。私たちのいろんなことばをもってイエス様のすばらしさを伝えることももちろんできますし、私たちは自分自身の救いのあかしを通してイエス様のすばらしさを伝えることができます。でも、もし私たちがいつもただ自分のことばだけでイエス様のことを語っているのであれば、ただ描いているだけなのであれば、私たちはピリポの模範から学ぶことがあります。そうだと思います？例えば、私たちがだれかと自分の大好きな食べ物について話していたとします。友達に自分の大好きなその食べ物について、私たちはいくらでもことばで説明することができます。どんな色をしていて、どんな味をしていて、そしてどんなふう食べるのが一番おいしいのかをいくらでも熱弁することができます。でももし、いつもことばだけ、いつも説明だけするのだとしたら、私たちは自然にこんなふうには言いません？「うーん…一回一緒に食べに行きましょう。」と。いろんなことばで説明するよりも、実際に食べに行ったほうが、見に行ったほうが、その凄さを、そのすばらしさを見ることができるのです。イエス様の弟子として私たちもイエス様のすばらしさを伝えるという伝道の責任を負っています。そしてそんな私たちにできることは、イエス様のもとへと人々を連れて行くことです。「来て、そして自分の目で見てください。」と。先にも言いましたが、私たちのことばでイエス様の姿を、偉大さを説明することもすばらしいことです。救いのあかしを分かち合うことも間違っていないです。でも、それ以上に、私たちはイエス様の姿を見て取ることのできる、イエス様の姿が描かれているこの聖書のことばを紹介してあげることができるのです。自分自身もこの聖書を通してイエス様を知りました。そうだとしたら、そのイエス様の姿を聖書から見せてあげることです。「一緒にヨハネを読もう。」「イエス・キリストがどんなにすばらしいお方を、みことばから一緒に考えよう。」「来て、見てください。」と。それが、ピリポがなしていた伝道の方法でした。そしてそれは、今の私たちも同じようにできる責任でもありますし、また同じようにできる方法でもあるのです。主のすばらしさを知った者は、そのすばらしさを喜びの表れとして伝えようとするのです。イエス様は探し出してくださるお方なのだ。

2. ご覧になっておられるお方 47-49節

次に最高の師に関する事実の二つ目は、この方は「ご覧になっておられるお方」だということです。最高の師であるイエス様は、弟子を探すだけではありません。その者のすべてを、その者の心のうちさえご存じであられるお方でした。みことばの続きを見てください。47-48節にこのように書かれています。「:47 イエスはナタナエルが自分のほうに来るのを見て、彼について言われた。「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りがない。」:48 ナタナエルはイエスに言った。「どうして私をご存じなのですか。」イエスは言われた。「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです。」」これを読んで気づいた人はいます？ピリポはナタナエルに対して「来て、見なさい。」と伝えました。そのことばを聞いた彼はイエス様を探して近くまで来たのです。でも、そのナタナエルのことを真っ先に見た、ことばを発した方はだれだったでしょう？それは、イエス様でした。主ご自身がナタナエルをまず見られたのです。そして先に言われました。「彼のうちには偽りがない。」と。ここで使われていた「偽り」ということば、これは興味深いことばで、もともと「わな」とか、また特に釣りに使う「疑似餌(ルアー)」といった意味を持っています。釣りをする時、ルアーを使ったりしますが、何のために使うでしょう？ルアーを見たことがありますか？ぱっと見、本物に見える物もありますが、全く本物に見えないようなカラフルな物もいっぱいあります。そういった偽物を用いて実際の餌の姿や動きなどを真似させて、魚をだまそうとするのです。「偽り」ということばにはこんな意味

がありました。ですからイエス様が「ナタナエルのうちに偽りがありません。」と言われたとき、これは、「彼のうちに罪がないです。」と言わんとしたのではなくて、「彼のうちにはだれかをだまそうとするような欺きやうそがないのだ。」ということを表していました。またナタナエルは当時の社会にあふれていたような見せかけだけの偽善者ではなかったのです。彼は誠実で正直な人でした。裏表のない、心に偽りを持たない真っ直ぐな人だったのです。そして凄いのは、イエス様はそんな彼の内側というものをご存じだったということです。ナタナエルがやって来て自己紹介をして説明をしたから知ったわけではありません。彼がまだ何も話していない時に、イエス様は彼の歩みもそうです、彼の心のうちもすでに知っておられたというわけです。イエス様はすべてをご覧になっている、全知のお方でした。人として来られたその御子は、変わらずに神様のご性質を持っておられたまことの神様だったということです。そうですね。私たちが聖書を見ると、神様だけが唯一どんな時もすべてのことを知っておられるお方だ、とそう繰り返し表されています。例えば詩篇 139 : 1-3 を見ても、神様に対してこんなふうに表現がなされるのです。「:1 【主】よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。:2 あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。:3 あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。」と。また箴言 15 : 3 にもこのように書いています。「【主】の御目はどこにでもあり、悪人と善人とを見張っている。」イエス・キリストはすべてをご存じのまことの神様でした。

ちょっとナタナエルの立場に立って考えてみてください。いろんな疑問を持ってイエス様のところに行こうとしました。すると、イエス様は自分の心のうちをすべて見抜かれたのです。彼は大いに驚いたでしょう。何の関係も持っていませんでした。そんな自分のことをすでに知っているだけではなくて、突然自分の歩みについても語り出したその人物のことを、彼は不思議に思ったでしょう。だから彼は正直に尋ねていました。48節で「どうして私をご存じなのですか。」と。イエス様はそれに対してこのように答えておられました。「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです。」と。皆さん、これがイエス様の姿でした。ピリポが「来て、見なさい」と告げる前から、ピリポがナタナエルと出会うその前から、イエス様はナタナエルのことを知っておられました。だれかから情報を聞く必要などありませんでした。最初からご覧になっていたイエス様は、ご自身の情報だけで十分だったのです。

イエス様がすべてのことを知っていてくださるというのは、私たちにとっても大きな慰めを、大きな喜びをもたらす事実だと思いませんか？先にも触れましたが、イエス様は私たちの愚かさや罪深さを知っていてなお、ご自分の愛を示してくださいました。しかもその知識というのは、私たちが実際に何かを行うよりもはるか前から、いや、もっと言えば、私たちが生まれるその前からもう始まっているということです。神様の愛というのは、すべてのものが創造されるよりもその前から、この世界の置かれるその前から、もうすでに存在していたということです。エペソ 1 : 4-5 にこう書いていました。「:4 すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。:5 神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。」神様は、私たちが何かをしたから知ったのではありません。神様は、私たちが生まれるその前からすべてをご存じでした。思いませんか？今の私たちもひどい自分たちの罪深さを見ます。でもこの神様は、私たちが生まれる前から私たちのすべてをご存じなのです。本来ならご自身のその聖さのゆえに、神様に逆らうことになる、罪に罪を重ねるそんなすべての者を滅ぼして当然だったでしょう。でも、それでもそれを知っていながら、みずから愛を示し、救いの手を差し伸べ、ご自分のもとへと人々を招こうとされたのです。知らずに探し求めてくださるのもすばらしいことですが、すべてを知っていながら、それでも探し出そうとしてくださったこの方の愛は、どれだけ深いものでしょう。この方の知識はすべての面に及びます。私たちのこれまでのことばや行動だけではあり

ません。今もそしてこれから先に持つ考えも思いもそのすべてを知っていてなお、それでも忍耐とあわれみを示して私たちを助け出そうとしてくださいそのお方は、どんなに素晴らしいお方でしょう？素晴らしいのは、私たちはこの最高の師の弟子として、この最高の師とともに歩むことができるということです。すべてを知っていてなお私たちに手を差し伸べてくださった、そんなお方とともに歩むことができるという喜びがあるのです。

イエス様と出会ったナタナエルは、この方がだれなのか、その正体にすぐに気づきました。だからすぐにその主を心から認め、へりくだって、ふさわしい礼拝をささげていました。49節を見るとこう書いていたのです。「ナタナエルは答えた。「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」」果たして私たちはどうでしょう？私たちの心をご覧になって、すべてを知っておられるその主に喜んで従っていきたくないと、そう望んでいるのでしょうか？ほかのだれかの救い主ではありません。自分自身の救い主として。ほかのだれかの王ではありません。自分自身が仕える王としてこの方の前にただひれ伏し、すべてをゆだねて生きていこうとしているのでしょうか？それとも頑なに、自分には救い主はいりません、自分が自分自身の人生の王であって主人であって、イエス様を王として認めたくありませんと、拒みながら歩んでいないのでしょうか？もしまだそのように歩んでいるなら、どうかきょうその生き方をやめて、そこから向きを変えてイエス様を求めてください。いくら周りの目を欺くことができたとしても、すべてをご覧になっているこの方の前には何も隠れていません。この方の前では何の言い訳もできません。そして、この方の前に立つ日がいつか皆、やって来ます。だから、まだこの主を知らないのなら、どうかこの方を心から信じ受け入れて、何よりも愛する弟子として歩むことのできる喜びをきょう知って帰ってください。

3. 架け橋となられるお方 50-51節

そして最後にもう一つだけ。最高の師に関する三つ目の事実、それは、この方は「架け橋となられるお方」だということです。イエス様は探し出してくださいただではありません。すべてをご覧になっているだけではありません。この方は架け橋となられるお方だということです。みことばに戻って見てみると、このように1章は締めくくられていました。50-51節「:50 イエスは答えて言われた。「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったので、あなたは信じるのですか。あなたは、それよりもさらに大きなことを見ることになります。」:51 そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。」」と。ここでイエス様は、ことばに言い表すことができないほどの素晴らしい約束を口にされていました。いちじくの木の下にいた自分のすべてを知っておられた、ということに驚きを隠せなかったナタナエルに向かって約束をしておられただけではありません。よく見てください。50節では「イエスは答えて言われた。「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、…」」と書いていましたが、51節を見ると、主語はどうなっています？「そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。…」」と。これは小さな違いに思えるかもしれませんが、大きな違いでした。イエス様はナタナエルだけに宣べられたわけではないのです。ナタナエルだけではなく、すべての弟子に対してこのことを宣べられました。すべての弟子に対して、イエス様は素晴らしい約束を与えておられたのです。イエス様ははっきりと言われるのです「確かに心を読み取るということ、これもあなたたちにとっては到底信じられないことかもしれません。でもそれ以上に、はるかに凄いもの、大きなものをあなたたちは見ることになります。」と。そしてその大きなことが何かを説明するために、イエス様はここに、ある場面を引用されていました。最高の教師であるその主は、旧約聖書に精通しているような者たちにもよくわかるように、彼らがよく知っている話を持ち出されるのです。それが、創世記28章に出てくるヤコブの見た夢の話でした。

最後に28章を見てみましょう。ヤコブという人物はこの時深刻な問題を抱えていました。なぜか？長子の権利を得ようとして、自分の父親だけではなく兄までも巧みにだました彼は、そのうそがばれていのちを狙われることになっていたのです。怒り狂った兄エサウからヤコブは荒野へと必死に逃げました。でもそこで疲れ果てて横になった場面がこの11-15節に描かれていました。「:11 ある所に着いたとき、ちょうど日が沈んだので、そこで一夜を明かすことにした。彼はその所の石の一つを取り、それを枕にして、その場所で横になった。:12 そのうちに、彼は夢を見た。見よ。一つのはしごが地に向けて立てられている。その頂は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしている。:13 そして、見よ。

【主】が彼のかたわらに立っておられた。そして仰せられた。「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしはあなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫とに与える。:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西、東、北、南へと広がり、地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される。:15 見よ。わたしはあなたとともにあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」想像できると思いますが、ヤコブは非常に追い込まれていました。疲れすぎていたヤコブは石を枕にして寝ました。いのちを狙われているその中であって、当然恐れや恐怖感を抱き、孤独を味わい、ひどく苦しんでいたでしょう。確かにヤコブは人を欺くような陰険さも持っていました。でもそんな罪深いヤコブを神様は決して見捨てることなく、愛されていたのです。神様はそんな絶望的な状況にあるヤコブの夢に現れ、ご自身が変わらずにともにいるのだということ、ご自身が変わらずに働いておられるのだということを示されました。そして、それを示すために特に、神の御使いたちが地上から天に届くはしごを上り下りしているその様子をもって、神様ご自身が絶えず働いているということ、ヤコブを守り、祝福を与えるのだということをはっきりと示されていたのです。それが、このはしごを通して明らかにされていたことでした。これを、イエス様は持ち出されたのです。

でも読んでいて気づきましたか？ヤコブの夢を読んで、そしてイエス様の1:54のこぼえを讀むと、どこかだけ違っていました。わかります？51節は「『…天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見えます。』」違っていたところは、「はしご」でした。ヤコブの夢は、「はしご」でこうやって行き来されていたのです。でも、イエス様は「はしご」とは言われませんでした。「はしご」の代わりに「天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、いまに見ることになる。」と言われたのです。つまり「はしご」はもういりませんでした。その代わりに、イエス様が天と地をつなぐ架け橋となられるというわけです。十字架で死なれ、死からよみがえり、天へと凱旋したそのまことの神様、偉大な主が、神様と私たちを繋ぐその道となられるというわけです。そしてこれこそが、だれも見なかったことのない、最もすばらしい大きなことでした。イエス様がこの地上に人の子として来られたのは、父なる神様を解き明かすためでした。イエス様こそが道であり、真理であり、いのちでした。イエス様を通してでなければ父に行くことはできませんでした。イエス様を通して、神様は私たちとともにいてくださり、イエス様を通して、救いを、守りを、祝福を与えてくださるというわけです。イエス様こそ、ほかのどんな王にもまさる最高の師だったのです。それが、イエス様がここで伝えようとしていた出来事でした。「ナタナエル、弟子たちよ、もしわたしがすべてのことを知っているということに驚いているのだとしたら、もっと凄いことを見ることになる。わたしが天から下り、死に、葬られ、また天に戻ることを通して、神様の凄さを、偉大さを、その栄光を明らかにするのをあなたたちは見るようになるのだ。」と。

皆さん、これが、私たちがついて行くことのできる最高の師の姿でした。どんなものにもまさるこの偉大な主に私たちはついて行くことができるということです。だから、かつての弟子たちは、この主を手にするのであればほかのものはいらないと。問われるのは、私たちひとりひとりです。私たちが探し出してくださるお方、私たちをご覧になっているお方、そして私たちと天とを結ぶその仲

介者、その架け橋であられるお方。このお方とともに歩むことが私たちにとっての喜びかどうか、それともこの方以外の何かをまだ求めているのかどうか。

この主とともに歩むことができる喜びを、私たちは知ることができます。ますます知り続けていくことができます。この方を愛しながら、ともにこれからも続けて主の栄光のために歩いていきましょう。